

「坂の上の雲」から紐解く地域産業活性化策に関する調査研究

現在、松山市では「日本一のまちづくり」に向けさまざまな基本計画がスタートしている。その計画の基本理念に「地元出身の英傑・俊傑達を描いた司馬遼太郎原作『坂の上の雲』をめざす」がある。

それは単に著名作品というだけでなく「高い志とひたむきな努力」というまちづくりには欠かせない大きな精神が謳われているからであろう。そこで本事業では、新しい“まちづくり”を目指すなかで「坂の上の雲」の舞台となった松山市そして小説に謳われている「創造力と実践力」という2つのキーワードを活用し成功する「まちづくり」に期待すべく調査分析を実施した。

ところで舞台となった松山市という風土は、多くの偉人達を輩出した地であることは意外にも知られていない。そこで第1章では、特に「松山と明治の偉人」というテーマでマクロ的見地から「何故今、坂の上の雲なのか」を紐解いていく。そこから読者に松山という地に興味を持っていただき、新しい発見をしていただきたいと考えている。まさに観光資源としては十分すぎるほどの「人材」ではないであろうか！

第2章では「創造力」というテーマを正岡子規の生き様から学び、そのバイタリティー・包容力等「子規のたぐいまれな才能を今に活かすとなれば！」と改めて考えてみる。そこには新しい観光開発のみならず、新しいビジネスのヒントの発見につながれば幸いである。

第3章では「実践力」というテーマを秋山兄弟の生き様から学ぶ。特に2人の共通項は少ないが共通点を探ってみると、まず「常に『客観的事実』を最優先に考え、自らの信じる道を貫いたことである」、さらには「戦いを望まない軍人」であったことである。こうした2人の生き様を現代経営に活かすビジネス本は数多いが、そうした頑なな哲学を是非とも観光経営にも活用して欲しい。

第4章では、前章の内容を踏まえて、現在実施されている「松山市再生事業」の詳細を述べている。特にそうした観光資源開発やまちづくり事業に取り組む中で様々な課題も生まれている。そうした課題解決の方策や今後のあり方を提言としてまとめている。

そうしたまちづくりを根幹とする観光経営あるいは人に注力した当小説の流れを汲み取り『坂の上の雲』がなぜにこれまで私たちを感動させ、観光資源として十分な材料を提供してくれるのかを全章を通じて検証した。数年先に多くの観光客が当地の名所・旧跡に來訪してもらえることを期待し、まちに訪れ「明治の息吹を感じ元気を取り戻す」場となることを祈念している。ただし『坂の上の雲』は、ご承知のとおり後半部は、日露戦争をテーマにしている関係で、その小説について賛否両論があることは熟知している。当然に、われわれの調査研究においても、戦争礼賛といった思想めいた考えはない。ただ今回人物をテーマにし分析する上で、各人の発した言葉の意味・延長線上に解釈が異なれば、誤解

が生じる部分もある。その点においては、ご承知いただきたいと思う。